

Title	投稿規程概略
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科
Publication year	1991
Jtitle	法學政治學論究：法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). No.10 (1991. 9) ,p.273- 274
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-00000010-0273

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿規程概略

し、平成元年四月以降に慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程または後期博士課程に入學し、論文刊行費を納入している者については徵収しない。

七 刊行期日 年四回の刊行を予定（別表参照）。

八 申込方法 応募用紙（投稿規程に付属）に必要事項を記入の上、別表記載の期日までに、後掲受付け窓口へ持参または郵送すること。

一 投稿資格 原則として大学院法学研究科修士課程以上の在学生、研究生、修士の学位を有するもの及び後期博士課程単位取得退学者とする。ただし、大学卒業の者であっても、研究機関、マスコミ、言論機関、その他企業や団体の研究部門において研究に従事している者に対する門戸を開放する。

二 原稿内容 法律学、政治学、社会学に関する学術論文。

三 原稿枚数 四〇〇字詰原稿用紙四〇~八〇枚。二〇〇字

詰原稿用紙でもよい。ワープロを使用する場合は、一行三〇字の一頁二〇行で、行間をゆったりととり、縦組みのプリントアウトにする。

四 執筆要領 論文審査及び論文を印刷する関係で詳細な執筆要領（投稿規定に付属）があるので、それに従つて執筆すること。

五 論文審査 提出された論文は編集委員会において審査の上、掲載を決定する。この間、編集委員会より原稿の手直しを求めることがある。

六 論文掲載費 論文掲載費として二万円を徴収する。掲載費は審査合格の通知を受けたとき、納入するものとする。ただ

	春季号	申込期日	提出期日	刊行期日
夏季号	八月一五日	一月一五日	三月一五日	
秋季号	一月一五日	二月一四日	六月一五日	
冬季号	二月一四日	五月一五日	九月一五日	
	五月一五日	八月一五日	一二月一五日	

十一 投稿規程の請求・投稿申込・論文提出受付窓口

直接の場合 慶應義塾大学三田教務部一・二番窓口

郵送の場合 **T-108** 東京都港区三田二一一五一四五

慶應義塾大学教務部法学部係

なお、郵送で投稿規定を請求する場合は、封書で表面左下に「論究投稿規程請求」と記入し、返信用封筒（長形三号を使用。宛先記入の上、切手七二円を貼付）を同封すること。

十二 問合せ先（封書に限る）

T-108 東京都港区三田二一一五一四五

慶應義塾大学法学部研究室内

藤原淳一郎

表面左下に「論究問合せ」と記入し、返信用封筒（宛先記入の上、切手六二円を貼付）を同封すること。

編集委員会幹事の斎藤和夫教授が、一九九一年度研究休暇に入られたため、小生が幹事役を引継ぐこととなった。
今号の応募状況を記すと、当初の投稿希望が二四件、論文提出が九件、（条件付き合格を含む）最終合格が（全員の学外者一件を含む）七件であった。

この二、三年に世界は、東西ドイツ統一、東欧の自由化、湾岸戦争、地球環境問題等、「世紀末」と呼ぶにふさわしいめぐるしい動きをみせている。社会科学者としてはこのような社会の変動を感受性豊かに受け止めていく必要がある。かといって足腰を鍛えていない若手がいきなりこれら現代的課題を直ちに手掛けることは、逆に危険な面もあると考えられる。したがって、大学院生にとっては、今は将来の飛躍に備えてあせらずにひたすら「蓄積」に専念するという選択肢も考えられよう。次号以降に向けての大学院生の一層の奮闘努力を期待するものである。

〔編集後記〕

(藤原淳一郎・記)